

「自ら判断し、正しい避難行動がとれる児童を育成する」

～ 体験活動を通して、考え・判断し・決定する力を磨く ～

平成 26 年度 高知県実践的防災教育推進事業 拠点校 香美市立大栃小学校

I 地域の概要

大栃小学校は、標高 235m の場所に位置し、南海トラフ地震により発生が予想される津波被害を受けることはない。そのため、保護者・地区住民の地震に対する危機意識は薄く、南海トラフ地震への備えも十分とは言えない現実がある。

しかし、津波の被害を直接受けなくても、長時間にわたる揺れで土砂災害・避難経路の遮断が起これ、食料品・飲料水・薬品の欠乏など、地震による大きな被害を受けるであろうと考えられる。

また、大雨による土砂災害も地震災害と同様に、身近に存在する災害として備えていかなければならない。

II 学校・児童の概要

本校児童は、キャリア教育の視点の 1 つであるコミュニケーション能力に課題がある。この課題を克服するための 1 つの手段として、体験活動を通して、考える・判断する・決定するといった機会を経験することで、克服できるよう取り組んできた。

昨年度は、小中連携や地域連携を深めることを目的に防災キャンプを計画し、夏季・冬季 1 泊 2 日のサバイバル体験活動を行った。また、企画・運営を児童中心に進め、より主体的に事業に関わらせることで、積極性を養うよう取り組んできた。

本年度はこうした経験を基にして、自らが判断し災害から身を守る行動が取れる児童の育成を目指し取組を重ねてきた。また、保護者や地域の支援も受けながら、児童に任せられる部分は任せることで、防災活動に主体的に関わろうとする児童を育ててきた。

山間地である校区の実態に合った防災教育として、津波よりも土砂災害から身を守る学習に重点を置き、適切で迅速な避難が

取れる行動力を身に付けるよう取り組んだ。

III 取組の概要

- ◆教育課程に防災教育を位置付けた計画を作成し、系統だった指導を行う。
- ◆自らの安全確保するための判断力や行動力を育成することを目指し、指導方法の研究開発を行う。
- ◆防災、減災教育の授業研究を行う。
- ◆さまざまな場面を想定した、実践的な避難訓練を実施する。
- ◆地域の課題を解決しようとするキャリア教育の視点を取り入れる。
- ◆保護者や地域の防災意識高揚に向け、啓発を図る。
- ◆防災教育の視点に立った教職員研修を行う。

IV 主な取組

1 研究授業

災害が発生するメカニズムや被害の大きさ、また避難の仕方や避難所での生活などについて学習し、将来経験すると思われる災害への対処方法について、年間 5 時間の防災学習を行った。

【 学年別研究授業 】

学年	題 材 名
1 年	地震が来たらどうするの？ [学級活動]
2 年	地震が来たらどうするの？ [学級活動]
3 年	どこにいても、地震の揺れから自分を守ろう [学級活動]
4 年	地震の揺れから身を守ろう [学級活動]
5・6 年	避難生活を考えよう [学級活動]

防災学習の実施については、指導方法の向上や教材開発を目指し、全学年で授業研究を行うことで、児童に分かりやすい発

問や授業展開について、研究を深めた。

なお、授業研実施に当たっては、高知県教育委員会学校安全対策課から講師を招聘し、各学年ごとに指導案の検討や事後の協議を行った。指導案作成の際は、事前検討会で指摘されたことを担当ブロックで再度検討し、授業に臨んだ。事後の研究協議では、低・高の2ブロックに分かれて分析を行い、協議内容はその後の指導に活かしていった。

《1年生授業実践例》

- ①題材名：地震が来たらどうする？
- ②ねらい：地震の揺れから自分の身を守る方法を考え、実践できるようにする。
- ③事前の指導：今までの避難訓練を振り返り、身の守り方について思い起こす。
- ④学習の展開：
 - 7行日記の内容を紹介する。
 - 写真を見て気付いたことを発表する。
 - 地震が起きると、学校ではどんなことが起こるか考える。
 - 教室にいるときの揺れから自分の身を守るための行動を考える。
 - 緊急地震速報を聞き、避難行動をとる。
 - 地震が起こったらどうするか発表する。
 - 振り返りカードを記入する。
- ⑤事後の指導：避難訓練で「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所に身を寄せることを意識した行動がとることができる。



《授業研究の様子》

《4年生の授業実践例》

- ①題材名：地震の揺れから身を守ろう
- ②ねらい：地震の揺れについて知り、避難行動を考える。
- ③事前の指導：南海トラフ地震が起こった時に、何に気を付ければよいのかを考えながらポスターを描く。

④学習の展開：

- 地震想定避難訓練について思い起こす。
 - 緊急地震速報を聞き、机の下に入る。
 - 地震時の室内での様子の映像を見る。
 - 机の下での自分の様子が今のままでよいか考える。
 - 教室内で机の下に入れなかった時にいた方がよいと思う場所に移動する。
- ⑤事後の指導：教室内で、避難訓練で学習したことを実践できる。



《授業研究の様子》

《5・6年生授業実践例》

- ①題材名：避難生活を考えよう
- ②ねらい：避難生活の様子を知り、地域の一員として自分ができようことを考える。
- ③事前の指導：身近に起きる災害について考える。
- ④学習の展開：
 - 事前の指導を想起する。
 - 避難所に行かなければならないのはどんな場合があるか考える。
 - 避難所の生活が、普段の生活とどう変わるか考える。
 - 避難所は生活を送るためにどうあるべきか考える。
 - 避難所生活に備え、今日からできることを考える。
- ⑤事後の指導：防災キャンプ



《授業研究・事後研究の様子》

2 実践的な避難訓練

これまでの避難訓練を見直し、より実践的な訓練を行った。さまざまな避難場面を想定し、これまでに学習したことが訓練に

どの程度活かされているかチェックを入れながら実施した。

【 避難訓練の実施 】

月日	地震の想定
5/8	授業中に発生
5/16	授業中に発生
6/26	放課後に発生 (学童保育と連携)
7/9	掃除の時間に発生
9/29	休み時間に発生
10/8	読書の時間に発生
	夜間に発生
11/10	朝の時間に発生
12/8	集会中に発生
1/8	集会中に発生
2/	授業中に発生
3/	卒業式練習中に発生

3 防災キャンプ

震度7の地震が発生し、停電・断水になり学校に避難したという想定で、11月8～9日に5・6年生が防災キャンプを行った。

全校が避難訓練を行った後、四国山地砂防工事事務所の支援を受け、降雨体験や土石流体感を地域の方と一緒にいった。

その後、5・6年生は仮想の避難生活を送った。

避難所で1日に使用できる水の量を1人3リットルに制限し、電気の使用を極力止めたりして、避難所に近い環境を作り出した。

また、プールの水をトイレに使ったり、食事は非常食と缶詰・カップラーメンだけにしたりするなど、不自由な避難生活を体験させた。

各自が非常持ち出し袋の中身を紹介したり、夜の避難訓練や公衆電話を使い家庭に連絡を取ったりするなど、日頃できない訓練を行うことができた。

2日目は、香美市消防署の方を招き、緊急時に役立つ救命救急法についても学習し、将来役に立つ知識と技術を習得した。



《降雨体験》



《夕食は非常食》



《夜の避難訓練》



《救命法の学習》



《トイレの水くみ》

4 教職員研修

防災教育の指導力向上・効果的な授業づくりを目指し、講師を招いての研修会を開催した。

月日	内容 / 講師
5/30	防災教育の方向性について 県教委学校安全対策課指導主事
5/9	防災教育の指導・授業づくり 鎌倉女子大学 吉田豊香先生
6/27	防災マップづくり 防災アドバイザー松岡雅士さん
7/18	非常袋・避難生活について 高知大学 大槻知史先生
8/4	防災教育の指導・授業づくり 鎌倉女子大学 吉田豊香先生

5 保護者対象講演会・引き渡し訓練

避難訓練の後、保護者を対象に講演会を開いた。高知大学大槻知史准教授から、備えておくべき非常持ち出し袋や避難所で役立つグッズについて紹介があった。

非常持ち出し袋にあまり関心を示さなかった方からも、いざという時の対応方法について質問が出るなど、積極的な態度が見られた。

その後の引き渡し訓練は、保護者の協力もあり順調に実施できた。

次回の訓練では、被害想定を変え困難な状況下で行うことを確認した。



《講演会の様子》



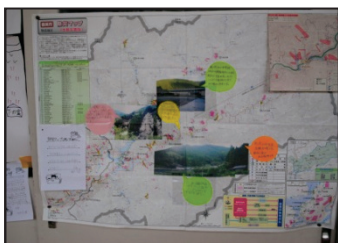
《引き渡し訓練》

6 防災マップ作り

長期の休みを利用して、自宅周辺地区の危険箇所について、家族や地域の方に聞き取りをした。そのことを地図に書き込むことで児童が考える防災マップ作りを行った。

この地図を基に、3地区でフィールドワークを行い、起こりそうな災害や地盤の様子について地質の専門の方に話を聞きながら、自分たちで考えたことが正しいか検証した。

児童は、専門的な知識に触れることができ、より一層防災マップ作りに拍車がかかった。



《危険箇所を書き込んだ防災マップ》



《県砂防ボランティアの方とのフィールドワーク》

7 昭和南海地震についての聞き取り

昭和南海地震を体験した地域の方を講師に招き、4年生がその時の様子を聞き取った。

近い将来発生するであろうと言われている南海トラフ地震に備え、貴重な体験談を聞くことができた。



《体験談の聞き取り》

V 成果と課題

1 成果

○避難訓練を繰り返す中で、災害時に自分の命は自分で守る方法や行動する力を徐々に身に付けてきた。日頃のちょっとした会話の中にも「頭を守るために机の下に入ろう。」「上履きを履かんと地震の時、足を切るよ。」などの言葉が聞かれ

た。災害は自分たちの生活に無関係ではないことを理解しているようだ。

- 南海地震の聞き取りを行う中で、災害に備えることの大切さを知ることができた。
- 今年は自然災害が多かったので、その都度、事実を新聞で検証した。教師が説明するより、実際の写真や記事は説得力があり、学ぶことが多かった。スクラップ新聞を作らせた時、記事への書き込み内容が深く記され驚かされた。
- 防災キャンプでは、具体的な想定（震度7弱の被災後の停電、断水状態）で行った。たった1泊2日のキャンプであったが、不便な避難生活を体験した子どもたちは、生活するためのスキルや備えの大切さを学んだだけでなく、災害時こそ人と人のつながりが一番大切であることに気付くことができた。
- 夏休みの自由研究では自分の住む地域の危険について、保護者とともに調べてまとめることができた。

2 課題

- 防災意識がまだ十分でない家庭があるので、非常持ち出し袋の用意や避難場所の確認などが行えるように啓発していきたい。
- 大柄は地盤が強固で安全だとの思い込みが一部にあるようだ。地盤や地形を理解した上でより防災に対する意識を高めるよう、今後は取り組んでいく必要がある。
- 災害はイメージ化しにくい。児童にいつ遭うかもしれない災害をイメージさせ、被害を最小限に留められるよう、これからも意識付けを続けることが重要だと考える。
- 「自助」「備え」の大切さは認識できた。スキルも上がっている。しかし、年度当初に目標とした「共助」、地域住民への取組や発信はできていない。
- 復興が遅れている東日本の被災地や、原発問題に対しての意識は希薄である。高学年として、広い視野に立った課題解決の意識を育てたい。